

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト第17号

act

art,
culture,
tradition

17

August 2014

役者のつくり方



A woman with her hair styled in a bun, wearing a white lace blouse with a large red floral brooch and a long, dark, flowing skirt, stands on a stage. She is holding a script and looking down at it. The background consists of dark curtains and a stage floor. The lighting is dramatic, highlighting the woman and her script.

役者

あるときは一輪の花のように。あるときは極悪非道な悪人に。またあるときは、人ならざる神や悪鬼に。演劇は、衣装も舞台装置も音楽もなくとも、観客とたったひとりの役者がいるだけで成立する。しかし、その逆はありえない。身一つで表現するからこそ、誰にでもなることができるが、一朝一夕には完成しない、それが役者。

【演劇】

役者のつくり方

ひとりの人間ではとうてい経験できない多くの仮面をかぶり、表現する「役者」。役者って、どうやってつくられているんだろう？
どんなことをして役者になるんだろう？
舞台上でしかみていない役者の裏舞台を覗き見ることで、役者の深遠なる世界に近づいてみます。

[取材撮影協力：yhs]



役者をつくる、稽古の一日。



～劇団yhsの場合～

「役者ではなく、プレイヤーと呼んでいます」と劇団yhsを立ち上げた代表でもあり演出家でもある南参さん。劇団ごとに稽古の仕方が異なるのは当然ですが、呼び方自体を変える劇団は珍しい。一体どんなふうに役者(プレイヤー)はつくられているのか? 稽古場の様子をのぞいてみました。

たとえば、こんな稽古です。

稽古場は、とあるビルの一室。日が暮れてから始まる稽古の一日を、プレイヤー・曾我夕子さんにフォーカスしてレポート。



20:00
仕事→稽古場へ
日中はお仕事をしている曾我さん。稽古場に来る時のテンションは「普通」もしくは「やや低め」。この日は「笑顔め」で。



20:30
ストレッチ、台本のチェック
徐々に集まりはじめる劇団員のみなさん。各々セリフの練習やストレッチなどを始めます。



【インタビュー】 INTERVIEW

演出席から思う「役者」のこと。

舞台上でどれだけ「遊べる」か、を「プレイヤー」と試しつつける。



劇団yhsでは、役者のことをプレイヤーと呼んでいます。役者って呼び方でもいいんですけど、役者っていうと台本を読んで、それを理解しようとただ演じるものって印象が強いのと思うんです。でも、僕はそれプラス遊ぼうって気持ちがあるんです。書かれた脚本どおりに動くだけじゃなく、本の世界観の中でアドリブを入れて遊んだり、観に来てくれた観客とも、遊ぶ。そういうことを意識してもらうには、呼び方を変えた方がいいかなと。yhsは同じ高校の演劇部メンバーで立ち上げた劇団なんですけど、学生時代は脚本家が一番偉くて、次にそれを解釈する演出家、その下に役者・スタッフがいるっていう図式があったんです。で、僕が既成の脚本を使って演出をしていた時に、解釈が違うって言われたんですね。作者のあとがきには違うことが書いてあるじゃないかと。僕は演出家や、広く言えば読者の解釈というのはいろんなもの

のがあるっていいと思っているんです。演じる人ならではの解釈やアドリブが入って面白くなれば、そっちの方がいいんじゃないかと。だから稽古の最初の方ではあまりダメ出しはしません。まず、いろんなことをプレイヤーにやらせてみて、いいところをチョイスする。劇団を立ち上げた頃はこの方法が劇団員にもなかなか理解されなくて大変でしたが(笑)、十何年も続けていると、たとえば小林エレキ(*)は僕が考えた演出プランと全然違うものを出してきて、しかもそれが面白ってときもあったりする。そういうときが一番嬉しいですね。緻密に世界観をつくりあげていく演劇もあると思いますが、結局舞台は生もの。同じものを作っても、観客は毎日違うのでアクションやその場の空気も変わるし、絶対同じものは生まれません。それが演劇のいいところですよ。舞台や役者って、観客とつくりあげていくんだと思います。

PROFILE

南参

[ナンザン]

劇団yhsを1997年に結成。yhsの作品の脚本・演出を担当。教文短編演劇祭2013では見事劇団を優勝に導き、今年度も出場、王座防衛を狙う。



* 劇団yhs立ち上げから所属。教文情報誌「らく」vol.34にて紹介記事あり。



20:40
立ち稽古
この日は舞台「つづく」の冒頭部分を稽古。曾我さんは「近未来の札幌」に生きる一人の女性を演じます。



21:00
演出からダメ出し(?)
厳しいダメ出しかと思いきや、今回は淡々と、時には笑いが起こる雰囲気。物語の背景や、脚本が生まれた経緯も語られ、舞台の世界観が稽古場に作られていきます。



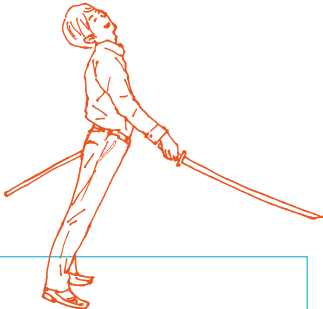
22:00
休憩中は広報の仕事も
曾我さんは劇団のブログ更新などの広報係も担当。劇団運営も大事な仕事。



23:00

稽古終了
声もからだも頭も使って、今日の稽古は終了。公演前は週に3〜4日稽古日があることも。役者は、まず体力と気力が必要なのかもしれません。

To be continued...



さあ、ステージへ。

演劇フェスタへいこう。

教文演劇フェスティバル2014

夏の教文恒例イベント、通称「演フェス」。「短編演劇祭」を中心に、初心者から経験者まで参加できる各種ワークショップも勢ぞろい!

【開催日】 7月22日(火)～8月28日(木)

【お問い合わせ】
教文演劇フェスティバル実行委員会事務局
TEL.011-271-5822 FAX.011-271-1916
(電話受付時間 10:00～17:00) 第2、第4月曜日休み



札幌演劇シーズン 2014-夏

札幌で創作され過去に高い評価を獲得した作品を約1ヶ月間にわたり上演する。今夏は5作品が参加。

【開催日】 8月1日(金)～8月31日(日)

【お問い合わせ】
札幌演劇シーズン実行委員会事務局
TEL.011-281-6631 (株)ノヴェロ内(平日10:00～17:00)



札幌劇場祭 Theater Go Round 2014

市内9つの劇場で上演される、演劇、お笑い、人形劇、オペラなど多彩な作品の中から、いま一番おもしろい舞台を決めます。

【開催日】 11月1日(土)～11月30日(日)

【お問い合わせ】
さっぽろアートステージ実行委員会事務局
TEL.011-281-7117 (平日 10:00～17:00)



撮影: 原田 直樹(n-foto)

役者づくりのレシピメモ

「演じてはいけない」演技理論? 「スタニスラフスキー・システム」

世界中にはたくさんの「おしぼいのつくり方」がありますが、「スタニスラフスキー・システム」はその中でも最も有名な「俳優のつくり方」です。日常の動作は思わず言ってしまう、やってしまうものですが、舞台上で役者は意図的に、でもわざとらしくなくそれを再現しなければいけません。その「思わず」を体系的に、何度でも再現可能にしようとするのがこのシステムで、ソビエトの公式演劇理論に指定されたことでもあります。このシステムが考えられる以前に主流だったのは、オーバーなアクションや

紋切り型の「古典的」な演技。それを否定し、自然に演じるために生まれたこの理論は国を超え、ロバート・デ・ニーロやマリリン・モンローなどのハリウッド俳優も学んでいたといえます。リアルを追求するこのシステムは、紋切り型の「泣く」「笑う」演技は受け入れません。まず「泣きたい気持ち」「笑いたい気持ち」をつくるために自分自身の経験をもとに感情を思い出し、「役」の人物の気持ちをつかんで舞台上に立てば、演技を意識しなくても自然に近い泣き笑いが起こる、と考えます。現代はこれ以外にも多くの演技理論がありますが、役づくりの第一歩に知っておくのもいいかもしれません。

